書いてくれたんです。

そういう事例はいくつかあるんですけれども、では、そういうことがたとえば、動物飼育をすることによってこんなに優しくなりましたとか、こんなに人に対して優しくなりましたということが、本当に動物飼育だけでそうなったのか、それにプラスしていろいろなことがあるわけです。たとえば、母親として子どもの見本にならなければいけないという責任感もあるわけです。多様な影響によって現実が見えてくることもあるので、教育というのは、１つのことでなかなか語れることではないので、やはりある意味ではその効果というものが、おぼろげながら、きっとこうなんだろうという実感はあっても、これだからこうですよ、というふうに断言するためには、ちょっとたくさんの事例を集める必要があるのではないかと、正直思うわけです。でも、今ご指摘のように、そういういい事例をたくさん紹介することによって、少し躊躇していた先生や、いろいろな保護者の方が、前向きに動いてくれるということはあるので、いい意味でたくさんの事例を紹介する場をつくるように、こちらとしても努力していく必要があるし、特に保護者に理解してもらわなければいけないので、そういう努力は学校現場としても、どんどんしていく必要があると思っています。

＜中川＞

２９ページの右の下の方に、教室内飼育の利点欠点という表があります。これは鳩貝先生と私たちがまとめたんですけれども、これ、左側に「なし」と書いてあるのは、教室内で飼育していない先生です。その先生は、利点については、心を癒すとか、生命尊重の心を養うとか書いてありますが、何よりもいちばん数が多いもの、環境が不衛生になるという点をあげています。それからもう少し上で、授業妨害になる欠点があると、こんなふうに答えています。ところが、右の方は、現在教室で飼育している先生の感想です。その中でも、環境不衛生については１２．３％の先生があげましたけれども、その下の方の利点がすごく大きいという特徴があります。それに授業妨害もないということですね。

教育というのは、私は威張れる立場ではないんですけれども、今こうやったから子どもがこうなったということはあり得ないことだと思います。今こういう種をまいて維持しておいたら、いつかこうなるということがあって、それでも、このアンケートに答えてくれた先生は、ごく短い経験の中でこのような回答をしてきたわけです。ということは、一つ大事にしていっていただけたらと思います。長いものだと思います。

＜山崎＞

私もごく普通の現場にいるわけなんですけれども、子どもたちが飼育にかかわるのは、１年間という期限付きですけれども、今、５年生になっても気にしている子たちはいます。先ほどのイヌのこともあったんですけれども、外の飼育ですと、たくさんの動物をたくさんの子どもたちで世話をするわけです。私たちも教育の仕事をしていて、子どもたちがあと十数年したら親になるという、長期的なスパンで子どもたちを見ていくということはとても大事だと思います。子育てしているお母さんが公園で孤立化しているとか、子育てがすごくたいへんだというのをうかがいます。でも、子どもたちが飼育にかかわっていると、子どもたちにとって動物は、自分たちの子どものような対象になっていて、何人かの子どもを一緒に育てているという疑似体験というか、そういうことをしていると端から見ていると見えます。だから、客観的にも見るし、愛情を持っても見るしということで、将来子どもたちが、親になったときのとてもいい経験をしているのではないかと思います。保護者にも、そういうことがすごくいいことだとか、いい発言があったとか、飼育をやったということだけではないんでしょうけれども、いろいろな変化があったとか、いじめになりそうだったけどここで歯止めがかけられたとか、そういう事例を親御さんに声を大にしていうっていうことがすごく大事だと思います。また、去年の１年間の中でも、すごく保護者の方々に支えられた、地域の方々に支えられたということもあるので、こちら側でただ義務でやっているのではない、私たちの学年でもこんないいことがたくさんあった、ということを声を大にして言っていく。次の年は、私も今年は１年生を持っているんですけれども、また違う先生が飼育をする。そして、そこをサポートする。また次の年に、違う先生が携わるということで、いいことを、声を大にして伝えながら、やっていくということが大事かなと思います。いっぱい失敗もあるんですけれども、そういうのを広げていくということも大事かなという感想を得ました。

＜鳩貝＞

時間が迫ってきていますので、いまお手をあげた３人の先生方に限って、ご発言をお願いします。短時間で申し訳ありませんがよろしくお願いいたします。

＜－－＞

私は保育園を経営しております。こうした研究を通してこれからの日本をつくることになるかもしれないということを考えています。命は命から

しか学べないと思っておりますので。命を学ぶことは平和な社会へ、まあそんな単純にはつながっていかないと思いますが、希望的な観測はもっています。

この会は、学校飼育動物ということの研究会ということですが、私は保育の立場で言わせていただきます。

保育園では、ウマやヤギを飼っている園もあります。また、ブタを飼っているところもあります。ウサギはもちろん、アヒルとかウズラとかも飼っています。また、たくさんの動物を飼っているところと飼っていないところもあります。その飼育の仕方は各園に任されているところがあります。学校でやっている生活科のような内容は、すべて保育園で終わってしまっている場合もある。

だから、この研究会の中で、幼児教育であれば幼稚園もその中に入りますけれども、保育園のそうした活動に対してどのようなとらえ方をされるのか、ということをお聞きしたいというのが一つです。保育段階では、そういったレビューは実際たくさんあるんです。

あともう一つは、愛玩するような動物だけではなくて、命を分け与えている家畜にふれあうことについて、どのように考えていらっしゃるのか、その辺のところをお聞きしたいと思います。

＜鳩貝＞

まず、学校飼育動物ということで「学校」と書いてありますが、これは、全部書き並べていくと、どうしても長くなってしまいますので、「学校」というのは、子どもの発達に応じた教育をする場、というように広い意味でとらえていただきたいと思います。これは小学校と限定しているわけでもないし、教育にかかわるということで、保育園、幼稚園も含めたものであると、私どもは理解しています。そういったことの説明が不足であったかと思います。

それから、家畜との関係、これもいろいろな実践等もございますし、命とかかわるということで、その辺を具体的にいろいろ実践されているところもあります。これも、われわれの側でどうだ、ということではなく、みなさんと一緒に議論しながら、家畜とのかかわりをどう指導していくかということ、子どもたちの発達段階とともにどうプログラムを組むかということについても、積極的な提言をいただきながら考えていきたいと思います。

それから、保育学会ということもありましたけれども、いろいろな学会でいろいろなことが行われていますが、飼育をするということに焦点を当てて、いろいろな学会の先生方にも集まっていただいて、共通の土俵で話し合うという機会が、この研究会をもとにできるのではないかと思っております。特に教育心理の専門家とか発達心理の専門家とか、いろいろなところでそういう研究もなされております。

実は、日本学術会議の中で唐木先生が委員長をされております、獣医学の研究者の団体、獣医学県連というものと、私どもが所属をしております科学教育（サイエンス教育）の研究者の集まりがありまして、両方のデータを出し合いながら話し合いをもつということをやっていて、シンポジウムも行いました。そこで言われてきたことは、きちんとしたデータを出そうではないか。まだまだそういうものが不足しているのではないか。経験論の中だけで話されていたり、一つの事例があまりにも立派すぎて、あと他のことが使えないとか、いろいろなことがあります。これから、それをもっともっと一般化できるような事例ですとか科学的なデータ、特に子どもたちの発達と疑問との関係の今後の研究が待たれているのではないかと思います。

先ほど、唐木先生の方から脳科学の話がありましたが、特に今、脳科学と教育というのが、脚光を浴びる時代になってきました。文科省の方でも重点施策の中に脳科学と教育というものが位置づけられていくというふうにも聞いております。

ですから今後、こういう部分が科学的な教育研究として、もっともっと進んでくるのではないかと思っております。ですから、こういう研究会の中で、われわれもそういうことを学びながら、お互いの知識を深めていくことが必要なのではないかと考えております。

＜矢田＞

三重県の矢田と申します。

先ほどから出ている話とだいたい合致するんですけれども、森田先生が言っておられたように、動物が具合悪くなって動物病院に連れて行ったら、なんだこんなの、と言われてしまったという話がありましたが、私も学校飼育動物にかかわる前はそう思っていたんです。思ってしまうんですね。それほどひどい状況になってから来ることが多くて、何でこんな状態なんだと思っていたんですが、やはりかかわるようになってくると、やむを得ないかなと思う部分がずいぶんあるんです。特に、飼っている動物についてあまりご存じでない先生方が割と多くて、訪問活動で子どもたちに説明する中で、ウサギっていうのは齧歯類じゃないんだよと話していると、子どもたちよりも先生方が驚くんですね。先ほど桑原先生がおっしゃっていたみたいに、歯の数が違うんですよというお

話からしていくと、ものすごくビックリされるんです。そして、エサも当然違うんですよという話をしていくと、実は子どもの方が知っていて、先生方がやたらと横で感心しているんです。

そういったサポートは私たち獣医師は十分できるんです。ところが、その話をしたあとに懇談などをしていると、今度は教育的な意義はどうでしょうとか聞かれるんです。そう聞かれましても、逆に私たちは教育の専門家ではないですから、説得力のあるお話がなかなかしづらいんですね。先ほどの教室内飼育のことにしても、こんな飼育方法もあるんですよ、というお話をしても、「ああそうですか」で終わってしまうんです。ですから、できればそういう点では、教育界のこと獣医師界のこと、そういういろいろなことがクロスして行われるこのような研究会では、教育界での先駆者の先生方の事例をどんどんペーパーにしていただいて、私どもが学校訪問したときに、こんな事例がいっぱいありますよということを出せるようにしていただくと、非常にありがたいと思います。

それから、先ほどの青少年のことと関係しますが、私の休診時間に、病院の前にいわゆるシャコタンで派手な車が止まって、暴走族が殴り込みに来たのかと思ったんですが、弱りきったウサギ抱えてオロオロしながら、ものすごいヘアスタイルの青年がでてきたんです。「どうしたの？」と聞いたら、「まだ飼って１週間もしないのにぐったりして、どうしよう」と、半分涙目で訴えてきたんです。そして、診てあげて少し何とか治まって、そうしたらペコペコしながら帰っていったんですね。普段怖いような青年がそんなふうになるんですね。ですから、やはりそれなりの年齢になっても効果があるので、子どもにはもっと効果があるんじゃないかと思っています。

そういったことで、私たちにできることはどんどんしますし、利用していただきたいと思うわけですが、教育の専門家のみなさんからもいろいろな、逆にいうと私たちへのサポートもいただきたいと思っております。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。

あとお一人でお願いします。

＜島成＞

東京都の獣医師の島成です。

今日は、このようなテーマで開催されました、中川先生はじめ、関係者の方々に感謝申し上げます。

私は獣医師でございまして、動物病院も設営しております。その間に、今お話がありましたように、本当に学校の中というものは、私たち臨床のものからは縁がなかったんです。では、本当に病気が悪化したときに、先ほどの先生もおっしゃられたように、悲惨な状態を見ることになります。最近でもそのような現状はたくさんあります。そのようなことは私たち獣医師としては当然のこととして見ておりますが、単純に申し上げれば、学校の教材として、動物を取り上げるならば、やはり、それなりの手当ができるような体制で飼育なさらなければ、本当に、先ほどから何人もの先生がおっしゃっておりますが、温かい形で動物たちを子どもたちと結びつけることは難しいと思います。ましてや、それには文科省からきちんとしたカリキュラムが出て、そしてその中には予算もつけて、そこまでいかなければ、本当に家族としての動物も、それからまた、不潔な飼育状態とか、病院に行くのをためらうような動物の状態とか、先生方がご苦労なさることも、私は大間違いだと思います。

私も４０年間そのような状態をずっと続けてまいりましたけれども、最近はちゃんと区に申し上げます。これだけかかりましたけれども、十分の一か二十分の一をご請求いたします。港区ですけれども、千代田区も港区も、最近はその十分の一か二十分の一をお支払いくださるようになりました。やはりこれは表明しなければいけないことだと思います。

そして、今日のような大会が開かれるということは、もう十年に十年前は考えられなかったことです。それは、私も今日本動物病院福祉協会というところで、動物、特にイヌを中心ですけれどもコンパニオンアニマルと呼ばれる動物たちを連れて、高齢者とか学校とかそして、またハンディキャップを持つみなさん、ホスピス、小児科の病棟等をおたずねしていますけれども、そうした中で、今ここでこういう話題になってくる理由は、子どもたちにとっては、私は専門家ではありませんけれども、先ほども脳の科学ほお話が出ましたけれども、とてもイヌ、ネコといったような温血動物、ほ乳類は、人間と同じように同じ年齢の時までに、１０歳までの脳ができあがる。それまでの教育は非常に重要で、特に身近にいる温かい動物とふれあう体感教育が非常に大事だということがわかってきているわけです。そういうことをこれから本当に教育の中に活かしていただくことで、先ほどからお話も出ていますように、特に１０歳から先の男の子にとっては、男性ホルモンが活躍しはじめてからの男の子にとって、女の子のように母性本能ではかなわないということです。それでも、いわゆる動物たちに対する配慮は変わらないという素晴らしいデータもあります。ですから、いろ